
I love You

naoki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I l o v e Y o u

【Nコード】

N 7 7 6 6 B

【作者名】

n a o k i

【あらすじ】

U n d e r t h e B l o s s o m シリーズの短編。愛していると
言ってくれ(?)。

『欧米では夫は妻に毎日愛してるよと言わなければならないそうですが…』

「クロウさんっ」

大人しくテレビを見ていたはずのアンフィエルが声を跳ね上げて、どうしたのかとクローレンは洗いものをする手を止めた。

「はい？」

「クロウさん、クロウさん！」

「はい。聴こえてますよ」

ぱたぱたと子どものように足音をさせてアンフィエルが駆け寄ってくる。何度となく呼びかけられてもいやな顔ひとつせず、むしろ嬉しいだけのクローレンは微笑んで彼に向き直った。

「何ですか？」

「あのっ、あのねっ」

透き通るように白い頬を紅潮させて、桜色の唇が必死に言葉を紡ぐ。さらりと肩を滑り落ちる白銀の髪も麗しく、生来の美貌も相まって今すぐ抱きしめたい愛おしさだ。絶世の美女を描いた絵画の如く、「綺麗」と称するのが相応しい完璧な美貌を持つアンフィエルだったが、クローレンにかかれれば彼は「可愛い俺の天使」なのである。

笑顔の裏で今日も可愛い恋人を絶賛しつつ、クローレンはエプロンで両手を拭う。穏やかに次なるセリフを待っていると、アン

フィエルは耳まで薔薇色に染めた拳句に、

「あっ…あいつ…愛…っ…」

泣き出しそうに眼を潤ませて、とうとう顔を覆ってしまった。ぎよつとしたのはクローレンである。

「え？ え！？」

「ごめん…クロウさん…っ。僕…やっぱり無理…」

「ど、どうしたんですか！？ “アイ”…なんですか？」

慌てて細い肩を抱き寄せ、屈みこんで顔を覗き込む。そつと顎をすくって上向けると、水仕事で冷えた指先に、アンフィエルはぴくんと震えた。

「エル？ どうして泣いてるんです？」

困惑し果てた声音で問うと、長い睫毛を震わせて、ぱたりと雫を落としながらアンフィエルは眼を伏せる。

「さっき、テレビで…夫は妻に、毎日『愛してる』って言うものだからって言うって…」

「？ …それで？」

「僕、あなたに毎日言っただけだと思って…それで…」

空色の瞳を大きく見開いて、クローレンは硬直した。
アンフィエルは何が哀しいのか、ぼろぼろ涙を落しながら言葉を紡ぐ。

「でも、面と向かって言おうと思ったたら、やっぱり恥ずかしくて…
そんなの、だめだよな？ 夫失格…っ、わ」

ぎゅうつと力の限り抱きしめられて、声が上擦る。紫苑の瞳をぱちぱちと瞬いて、アンフィエルは困惑気味にクローレンを見た。

「クロウさん…？」

「いや、もう…俺が妻ですかとか、いろいろツツコミたいとは思ってたんですけど…すみません、なんかもう可愛すぎます」

「え…あ、ちよっ…どこ、触って…あん」

首筋に触れる唇と、背を撫でて下りてくる掌に甘い声をあげ、アンフィエルはぴくんと体を振るわせた。きゅつと眼を閉じて腕を回した背中に縋ると、鎖骨を辿る舌先が吐息を洩らして名前を呼んだ。

「…愛してる」

耳を掠めた声にはつと眼を見開いて、アンフィエルはそれに応えるべく唇を動かしたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7766b/>

I love You

2011年1月27日03時12分発行